

日本語教育における送り仮名の付け方

島 田 昌 彦

1. はじめに

ここ5か年ほど外国人主に中国人に対する日本語教育に従事してきた。平成2年(1990)には、北京の日本学研究センター(北京外国語学院内)において6か月間日本語専攻の大学院生(修士課程)並びに中国各地の大学から選ばれた日本語教員(講師・助手)に対し日本語の文章作成の指導にあたった。中国においての日本語教育で改めて気づいたことは、大学院生及び日本語教員は平常の会話力にあっては不自由はないが、文章作成では会話力と格段の差があり、会話力を大学生並みと位置付ければ、文章作成力は小学生程度であることがよく理解できた。具体的にいえば、まず高度な思索はしつつも内容的に意義のある文章が書けないことが第一であるが、併せて日本語として熟していないとともに、誤字脱字などが多く、特に漢字と仮名の使い方である送り仮名の付け方については、体系をもったまともな指導をうけていない事実気付かされた。この小論は、筆者(島田)が文化庁国語課の専門職員として、現行の「送り仮名の付け方」(昭和48年6月18日内閣告示・訓令)の成立の一端にかかわっているもので、どうしたならば、外国人特に中国人に対し、日本の送り仮名法の全体像を伝えられるか思案したものである(注1)。

2. 送り仮名とは何か

送り仮名とは、漢字の訓読に伴って発生したもので、すでに奈良時代には下記のような形態で意識されていた。

1475 ^{なにしかも}何奇毛 ^{こくだくこふる}幾許恋流 ^{ほととぎす}霍公鳥
^{なくこみきけ}鳴音聞者 ^{こひこそまされ}恋許曾益礼(万葉集)

すなわち、「恋流」「益礼」において、前者「恋流」は、上二段活用「恋ふ」の連体形「恋ふる」の活用語尾の一部分を示したものであり、後者「益礼」は、四段活用「益る」の「こそ」の係り結びである已然形「益れ」の活用語尾である。これらはいずれも、「恋」「益」という漢字を日本語読みするとき、読みやすくするため、活用語尾又は活用語尾の一部分を一字一音のいわゆる万葉仮名で表記したものである。

このような送り仮名は、平安時代に入ると訓点本の系統と漢字仮名交じり文の系統の二種に分かれて発達し、多様な形態を示して来たが、明治維新は近代国家にふさわしい統一を要求するようになる。まず、明治9年(1876)行政上の必要から陸軍と文部省の関係官の討議によってまとめられたのが、中根淑『日本文典下』所載の「送り仮名法則」である。引き続き、明治40年(1907)国語調査委員会が文部省や内閣官報局の協力を得て、「活用語の語尾変化を書き表す」ことを基本的理念

とする『送仮名法』を発表した。それ以後のすべての「送り仮名法」は、この国語調査委員会『送仮名法』の改訂の線で作成され、昭和24年（1949）の総理庁・文部省発行の『公文用語の手びき』の中の「送りがなのつけ方」に及ぶ（注2）。

昭和48年（1973）6月18日内閣告示・訓令、昭和56年（1981）10月1日一部修正の現行の「送り仮名の付け方」は、その基本理念は明治40年の国語調査委員会『送仮名法』と同じく、日本語と中国語との対比において、日本語は語形変化があり、中国語は語形変化がない、よって、語形変化の部分すなわち「活用語尾」を送るとし、7通則を立てている。送り仮名の付け方において、「活用語尾」を送るとする理念は、あくまでも、中国語との対比による言語学的もので、この言語学的把握の仕方は、「送り仮名の付け方」の全文にわたって一貫しているものである。以下、各通則ごとに、日本語教育という観点からその実質を明らかにしていってみよう。本文は、昭和61年（1986）9月文化庁刊『公用文の書き表し方の基準（資料集）』〈第一法規出版KK〉所載の「送り仮名の付け方」（169～177ページ）による。なお、引用文の末尾のページ数は、上記の資料集のものである。

3. 通則1は基本理念

「送り仮名の付け方」本文の通則1は、次のようになっている。

本文

単独の語

1 活用のある語

通則1

本則 活用のある語（通則2を適用する語を除く。）は、活用語尾を送る。

〔例〕 憤る 承る 書く 実る 催す
生きる 陥れる 考える 助ける
荒い 潔い 賢い 濃い
主だ

例外 (1) 語幹が「し」で終わる形容詞は、「し」から送る。

〔例〕 著しい 惜しい 悔しい 恋しい 珍しい

(2) 活用語尾の前に「か」、「やか」、「らか」を含む形容動詞は、その音節から送る。

〔例〕 暖かだ 細かだ 静かだ
穏やかだ 健やかだ 和やかだ
明らかだ 平らかだ 滑らかだ 柔らかだ

(3) 次の語は、次に示すように送る。

明らむ 味わう 哀れむ 慈しむ 教わる 脅かす（おどかす）
脅かす（おびやかす） 食らう 異なる 逆らう 捕まる 群がる

和らぐ 揺する

明るい 危ない 危うい 大きい 少ない 小さい 冷たい 平たい

新ただ 同じだ 盛んだ 平らだ 懇ろだ 惨めだ

哀れだ 幸いだ 幸せだ 巧みだ

許容 次の語は、()の中に示すように、活用語尾の前の音節から送ることができる。

表す(表わす) 著す(著わす) 現れる(現われる) 行う(行なう)

断る(断わる) 賜る(賜わる)

(注意) 語幹と活用語尾との区別がつかない動詞は、例えば、「着る」,「寝る」,「来る」などのように送る。

(171ページ)

まず、「単独の語」とは、現行の「送り仮名の付け方」の独特の術語で、「複合の語」と対になり、前者は、「漢字の音又は訓を単独に用いて、漢字一字で書き表す語」であり、後者は「漢字の訓と訓、音と訓などを複合させ、漢字二字以上を用いて書き表す語」で、通則1から通則5までが前者「単独の語」についての通則である(注3)。

次に「活用のある語」の「活用」とは何か基本的なことが問題となるが、日本語の会話には十分堪能である中国人に対しては、日本の小学校段階の国語教育で「活用」の指導に取り上げられている「仲よし言葉」という考え方が有効性を持つ。「仲よし言葉」とは、例えば「行く」という動詞について、それが活用する場合接続する「ナイ」「マス」「〇」「トキ」「バ」「命令」を具体的に取り上げ、それらと「行く」を結び付けさせると、そこに親密な「か・き・く・く・け・け」という活用が確認されるという方法である。三つ四つの動詞や形容詞の語例で、日本語における語形変化すなわち「活用」が理解されよう。なお、「活用」の種類については、通則1の本則の語例が4行で示され、上段から「五段活」「上一段活・下一段活」「形容詞」「形容動詞」の順に並べられていることを知らしめることも意義があろう。

続いて、本則に掲げられた14の語例を指折って、その音節数を確認させたい。列举された語例の音節数は次のようになっている。

憤る(5) 承る(6) 書く(2) 笑る(3) 催す(4)

生きる(3) 陥れる(6) 考える(5) 助ける(4)

荒い(3) 潔い(5) 賢い(4) 濃い(2)

主だ(3)

「五段活」「上一段活・下一段活」「形容詞」のそれぞれの段が五十音順になっているのは分かるが、掲げられた語例のすべてがその音節が異なっている事実^{たんのう}に注目を求める。このことは、ここでの語例がその音節の代表語を示したものであるとともに、いま展開されている送り仮名法が「音節」によって送り仮名の付け方が決定されるものではなく、あくまでも、「活用のある語(通則2を適用する語を除く。)

るものも考えられ、上掲の語例でいえば「憤きどおる 承けたまわる 書く 実のる 催よおす……」という仮名の使い方も考えられるからである。また、三音節以上の語例は、漢字に二音節担わせるというルールが立てられることは、いうまでもない。

通則1について、形容詞が本則と例外に位置付けされていることも知識として持っていなくてはならないものである。すなわち、古典語の「ク活用」は本則で、「シク活用」は例外で処理されている。これはこの送り仮名法を「法則」たらしめるため、あえてルールどおりに適用したために起こったもので、現在の言語感覚からすると納得できかねるものである。日本語教育においては、ここで「ク活用は状態概念」「シク活用は情意概念」を表すという意義上の相違について触れておきたい(注4)。

例外の(2)は、活用語尾の前に「か」「やか」「らか」を含む形容動詞の送り仮名の付け方である。ここで示された「暖かだ」「穏やかだ」「明らかだ」などは伝統的にも見慣れてきたもので、それ以外の付け方は考えられないが、この送り仮名法と平行して「細かい」「柔らかい」の「か」「らか」を含む形容詞の送り仮名の付け方が問題となる。現行の「送り仮名の付け方」では、通則2を適用することになっているが、該当の語例が少ないとはいえ、形容動詞と同じように、例外の(2)に掲げておくべきものであった。

例外の(3)は、限定列举されている動詞、形容詞、形容動詞の語例である。通則1やその他の通則でも、その通則を適用する語例の初めに「〔例〕」とあるものと、それがないものの二種があることに注目させたい。〔例〕とあるのは、あくまでも例示であって、類例がたくさんあることを示し、それがないのは、そこに掲げられた語例だけを意味する。すなわち、動詞では「明らむ」から「揺する」まで14語、形容詞は「明るい」から「平たい」まで8語、形容動詞は「新ただ」から「巧み」だまでの10語が例外となる。なお、形容動詞の場合、「新ただ」から「惨めだ」までの行と、「哀れだ」から「巧みだ」の行の二種に分類されている。それらの相違は、後者「哀れだ」「幸いだ」「幸せだ」の3語は、通則3の例外の(1)に「哀れ」「幸い」「幸せ」と名詞形が列举され、それらが形容動詞としても名詞の度合いが強いものという判断が国語審議会に働いたものと考えられる。そして、「巧みだ」については、「哀れ」「幸い」「幸せ」並みの名詞性はないが、「新ただ」～「惨めだ」の6語ほどの形容動詞性を含むとは考えられず、ここに見られるような中途半端な処理にとどまったものである。

許容の欄に掲げられた「表す(表わす)」以下「賜る(賜わる)」までの6語は、昭和34年(1959)7月11日内閣訓令・告示になった「送りがなのつけ方」の三つの基本方針

- (1) 活用語およびこれを含む語は、その活用語の語尾を送る。
- (2) なるべく誤読・難読のおそれのないようにする。
- (3) 慣用が固定していると認められるものは、それに従う。

の「(2)」に従ったもので、特に「行なう」はこれまでに表記習慣はなく、国語審議会が人為で作ったものであると、その僭越^{せんえつ}さを世間一般から非難された。改定された現行の「送り仮名の付け方」では、「活用のある語は、活用語尾を送る。」という理念に従い、活用語尾を送った「表す」「著す」「現れる」「行う」「断る」「賜る」を本則として、「表わす」「著わす」「現われる」「行なう」「断わ

る」「賜わる」を許容とし、昭和34年から昭和48年にいたる14か年間の表記の現実について配慮がなされた（注5）。

4. 通則2は「派生・対応」

ここには、いわゆる「派生・対応」という術語があてはめられる語群の送り仮名法が説かれている（注6）。

通則2

本則 活用語尾以外の部分に他の語を含む語は、含まれている語の送り仮名の付け方によって送る。（含まれている語を〔 〕の中に示す。）

〔例〕

- (1) 動詞の活用形又はそれに準ずるものを含むもの。

動かす〔動く〕 照らす〔照る〕

語らう〔語る〕 計らう〔計る〕 向かう〔向く〕

浮かぶ〔浮く〕

生まれる〔生む〕 押さえる〔押す〕 捕らえる〔捕る〕

勇ましい〔勇む〕 輝かしい〔輝く〕 喜ばしい〔喜ぶ〕

晴れやかだ〔晴れる〕

及ばす〔及ぶ〕 積もる〔積む〕 聞こえる〔聞く〕

頼もしい〔頼む〕

起こる〔起きる〕 落とす〔落ちる〕

暮らす〔暮れる〕 冷やす〔冷える〕

当たる〔当てる〕 終わる〔終える〕 変わる〔変える〕 集まる〔集める〕

定まる〔定める〕 連なる〔連ねる〕 交わる〔交える〕

混ざる・混じる〔混ぜる〕

恐ろしい〔恐れる〕

- (2) 形容詞・形容動詞の語幹を含むもの。

重んずる〔重い〕 若やぐ〔若い〕

怪しむ〔怪しい〕 悲しむ〔悲しい〕 苦しがる〔苦しい〕

確かめる〔確かだ〕

重たい〔重い〕 憎らしい〔憎い〕 古めかしい〔古い〕

細かい〔細かだ〕 柔らかい〔柔らかだ〕

清らかだ〔清い〕 高らかだ〔高い〕 寂しげだ〔寂しい〕

- (3) 名詞を含むもの。

汗ばむ〔汗〕 先んずる〔先〕 春めく〔春〕

男らしい〔男〕 後ろめたい〔後ろ〕

許容 読み間違えるおそれのない場合は、活用語尾以外の部分について、次の（ ）の中に示すように、送り仮名を省くことができる。

〔例〕 浮かぶ（浮ぶ） 生まれる（生れる） 押さえる（押える） 捕らえる（捕える）
晴れやかだ（晴やかだ）
積もる（積る） 聞こえる（聞える）
起こる（起る） 落とす（落す） 暮らす（暮す） 当たる（当る） 終わる（終る） 変わる（変る）

（注意） 次の語は、それぞれ〔 〕の中に示す語を含むものとは考えず、通則1によるものとする。

明るい〔明ける〕 荒い〔荒れる〕 悔しい〔悔いる〕 恋しい〔恋う〕

(171～172ページ)

日本語において「派生」とは、「汗」から「汗ばむ」が生まれ、「男」から「男らしい」が生まれたように、単語の形態において、本来独立した用法を持つ「汗」や「男」という単語に「ばむ」や「らしい」という本来独立して用いられることのない語を構成する要素（ここでは、これらを総称して「派生辞」と名付ける。）が添加して、新しい単語が生まれることをいう。これは、日本語において、日本人がより充実した陰影のある新しい概念を表現するために、一つの語に、さまざまな「派生辞」を添加して、新しい単語を造る創造的な活動である。このような「派生」を生む「派生辞」には、文法的に考えると、次の3種類があり、具体例を挙げると次のようになる。

① 活用語尾

〔例〕 宿（名詞）＋る（活用語尾）＝宿る

② 接辞

〔例〕 語る（Kataru）＋af（接辞）＝語らう（Katarafu）

③ 接頭語・接尾語

〔例〕 初＋孫＝初孫 春＋めく＝春めく

また、日本語における「対応」とは、日本語の動詞の中に「余る」「余す」「明く」「明かす」「尽きる」「尽くす」などのように、形態が類似していて、活用語尾や活用型の相違によって、自動詞と他動詞に分かれる一群の動詞が存在しているが、それらの動詞の組み合わせを「（自他の）対応」と称している。この「自他の対応」を構成する自動詞と他動詞の形態は、ほしのままのものではなく、次に示すように四つの対応の型が指摘され、併せて具体例を挙げてみよう。

① 活用語尾による対応

〔例〕 移る（自）・移す（他）、表れる（自）・表す（他） など

② 活用型による対応

〔例〕 立つ（五段活・自）・立てる（下一段活・他）

生きる（上一段活・自）・生ける（下一段活・他） など

③ 基本形とその派生形の対応

自動詞であれ他動詞であれ、基本になる動詞の語根に他動詞又は自動詞を作る接辞が添加することによって「自他の対応」を構成するものである。例えば、

$$\begin{array}{ccccc} \text{(自動詞)} & & & \text{他動詞を} & \\ \text{悩} & + & & \text{作る接辞} & \\ \text{む} & & & \text{as} & = & \text{(他動詞)} \\ \text{Nayamu} & & & & & \text{悩ます} \\ & & & & & \text{Nayamasu} \end{array}$$

のような組み合わせである。その他、「合う(自)・合わす(他)」「及ぶ(自)・及ぼす(他)」など。

④ 派生形相互の対応

3の「基本形とその派生形の対応」の発展したもので、次のような形成をとる。

$$\begin{array}{ccccc} \text{(他動詞)} & & & \text{自動詞を} & \\ \text{上} & + & \swarrow & \text{作る接辞} & = & \text{(自動詞)} \\ \text{ぐ} & & & \text{ar} & & \text{上がる} \\ \text{Agu} & & \searrow & \text{接辞} & = & \text{(他動詞)} \\ & & & \text{er} & & \text{Ageru} \end{array}$$

類例は、「尽きる(自)・尽くす(他)」「起きる(自)・起こす(他)」などである。

「派生・対応」のそれぞれについて、それが示す様々な組み合わせを明らかにしてきた。この「送り仮名の付け方」では、ここでの「派生・対応」を「派生・対応」という術語によらず、「活用語尾以外の部分に他の語を含む語」という把握の仕方をしている。その理由は、学術的であるよりも、国民一般の理解を期待したものであることは、いうまでもないが、「派生・対応」を「活用語尾以外の部分に他の語を含む語」という記述は、「派生・対応」の実質を言い得ているものと考えられる。

日本語における「派生・対応」の組み合わせの多数の形態を「送り仮名の付け方」では

- (1) 動詞の活用形又はそれに準ずるものを含むもの。
- (2) 形容詞・形容動詞の語幹を含むもの。
- (3) 名詞を含むもの。

の三種に分類し、語例を掲げる。列挙された各段ごとの語例は、「派生・対応」の一つ一つの異なる形態であって、日本語の世界での「派生・対応」の世界がいかに豊かであるか知られるところである。なお、この通則2の「自他の対応」は、「動く・動かす」「照る・照らす」「生む・生まれる」「及ぶ・及ぼす」などの組み合わせに見られるように、英文法の intransitive verb・transitive verbと同じく二元論的対立で示されているが、日本語の伝統的な「自他」は、これとは大きく異なり、本居春庭『詞通路』では、六元論で把握され、この六元論的理解のほうが、日本語の自動詞と他動詞の現実を伝えていることは、予備知識として持っておくべきものと思う(注7)。

「許容」には、13の送り仮名を省く語例が列挙されている。一見すると、通則の説明文にあるように、「読み間違えるおそれのない場合は、活用語尾以外の部分について――送り仮名を省くことができる。」と機械的に処理するべきものとの印象を与える。しかし、ここでの語例をつぶさに点検すると、例えば、「浮かぶ」や「暮らす」は、同じ「浮」や「暮」という漢字が使用されているが

「浮く」や「暮れる」とは意義上関係なく（「浮かぶとは、水中などに沈まず均衡を保つということで、「泛」という字が当てられ下から上への動きを示す「浮」とは異なっていた。また、「くらす」は生活を送るということで、夕方になる「暮れる」とは無関係である。），よって、「活用のある語は、活用語尾を送る。」という大原則に基づいて、「浮ぶ」「暮す」と送ると考えることも可能である。また、「押す・押さえる」「捕る・捕らえる」などにも同様の問題が存在するが、現行の「送り仮名の付け方」では、送り仮名を意義の関係から決定するのではなく、「読み間違えるおそれのない場合は、」という文章読解の視点から送り仮名を省くこととなっている。また、（注意）に掲げられた「明るい」「荒い」「悔しい」「恋しい」の四つの形容詞は、通則2の規則を適用すれば、当然「明かるい」「荒らい」「悔やしい」「恋いしい」となるはずのものである。ここでは、それらの語例の慣行となっている表記の実態を尊重し、通則1によるものとしている。

5. 通則3は名詞の送り仮名

基本理念に基づけば、名詞は語形変化しないので、当然送り仮名を付けないことになるが、例外もある。

2 活用のない語

通則3

本則 名詞（通則4を適用する語を除く。）は、送り仮名を付けない。

〔例〕 月 鳥 花 山

男 女

彼 何

例外 (1) 次の語は、最後の音節を送る。

辺り 哀れ 勢い 幾ら 後ろ 傍ら 幸い 幸せ 互い 便り 半ば
情け 斜め 独り 誉れ 自ら 災い

(2) 数をかぞえる「つ」を含む名詞は、その「つ」を送る。

〔例〕 一つ 二つ 三つ 幾つ

(172～173ページ)

まず「2 活用のない語」とは、「名詞・副詞・連体詞・接続詞」の四つの品詞を指し、通則3, 4, 5がここに該当する。ここでの特記すべき事柄は、名詞であって送り仮名を付ける語例がたくさんあるということである。「例外(1)」の限定列挙の17語を点検すると、「辺り」「後ろ」「幸い」「幸せ」「便り」「情け」は、いずれもその音読みや訓読みと読み誤らないための送り仮名である。すなわち、「その辺」は「そのへん」とも「そのあたり」とも読むことが可能で、「辺り」の送り仮名は読み分けのためのものである。その他「哀れ」「勢い」「幾ら」「傍ら」「互い」「半ば」「斜め」「独り」「誉れ」「自ら」「災い」は、読みやすくするための送り仮名と位置付けられる。なお、誤読・難

読を避けることを基本方針の一つとした昭和34年（1959）内閣訓令・告示の「送りがなのつけ方」で、既に「哀れ」「後ろ」「幸い」「互い」「半ば」「情け」「斜め」「誉れ」「災い」の9語は送り仮名を付けるものとしている。また、ここで「例外（1）次の語は、最後の音節を送る。」という規定は、通則5でも同じ表現をとるもので、送り仮名を付けることは最低にするという意志表示の現れである。

「例外(2) 数をかぞえる『つ』を含む名詞は、その『つ』を送る。」という表現はどう読んでも熟さないものである。この規定の背後には、次のような日本語の現実が存在する。すなわち、「一」から「十」にいたる数字を大和言葉で表すと以下のようになる。ここでの読み方は、昭和56年(1981)10月1日内閣告示・訓令の『常用漢字表』の音訓欄に示された「訓」による。

一 {ひとつ 二 {ふたつ 三 {みつ
 みっつ 四 {よつ
 よっつ 五 {いつ

六 {むつ　むっつ　　七 {ななつ　　八 {やつ　やっつ　　九 {このつ　　十 {とお

日本人はこれまで「三」「四」「六」「八」の四つの数について二様の読み方をし、もしこれを送り仮名で書き分けるとすれば、次に示すように、「三つ、三つつ」「四つ、四つつ」「六つ、六つつ」「八つ、八つつ」となるが、このような表記の慣用はない。ここの部分の取り扱いについては、まず、日本語の和語の数詞の正確な読み方を徹底させ、それらが表記される場合同一の形態を示すと指導すべきものと考えられる。

6. 通則 4 は転成名詞

ここには、通則 1 と通則 2 に展開された動詞及び形容詞の連用形が名詞として用いられる場合の送り仮名の付け方が説かれている。

通則 4

本則 活用のある語から転じた名詞及び活用のある語に「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いて名詞になったものは、もとの語の送り仮名の付け方によって送る。

〔例〕

(1) 活用のある語から転じたもの。

動き 仰せ 恐れ 薫り 曇り 調べ 届け 願い 晴れ

当たり 代わり 向かい

狩り 答え 問い 祭り 群れ

憩い 愁い 憂い 香り 極み 初め

近く 遠く

(2) 「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いたもの。

暑さ 大きさ 正しさ 確かさ

明るみ 重み 憎しみ

惜しげ

例外 次の語は、送り仮名を付けない。

謡 虞 趣 氷 印 頂 帯 疊

卸 煙 恋 志 次 隣 富 恥 話 光 舞

折 係 掛(かかり) 組 肥 並(なみ) 巻 割

(注意) ここに掲げた「組」は、「花の組」、「赤の組」などのように使った場合の「くみ」であり、例えば、「活字の組みがゆるむ。」などとして使う場合の「くみ」を意味するものではない。「光」、「折」、「係」なども、同様に動詞の意識が残っているような使い方の場合は、この例外に該当しない。したがって、本則を適用して送り仮名を付ける。

許容 読み間違えるおそれのない場合は、次の()の中に示すように、送り仮名を省くことができる。

〔例〕 曇り(曇) 届け(届) 願い(願) 晴れ(晴)

当たり(当り) 代わり(代り) 向かい(向い)

狩り(狩) 答え(答) 問い(問) 祭り(祭) 群れ(群)

憩い(憩)

(173～174ページ)

本則の「(1) 活用のある語から転じたもの。」の第一段「動き」から「晴れ」までは、通則1の動詞が転じたものであり、第二段「当たり」「代わり」「向かい」は、通則2の動詞に関連するものである。第三段と第四段は対比して理解されるべきもので、前者の語例は、昭和48年内閣告示・訓令の「当用漢字音訓表」で、例えば「狩 かる・かり」「答 こたえる・こたえ」「問 とう・とい」などと動詞と名詞が併記されたもので、後者の語例は、同じ音訓表で、「憩 いこい」「愁 うれい」「憂 うれい・うい」「香 かおり」などと名詞形だけが掲げられたものである。すなわち後者は、名詞としてだけ使用される語例であると判断されていた。第6段は、いうまでもなく、形容詞の連用形が名詞として用いられた場合の例である。

「例外」の項には、27語の送り仮名をすべて省いた転成名詞が限定列举されている。この27語を熟視すると、「謡～印」「頂～疊」「卸～舞」「折～割」で取り扱いが異なり、例外の27語は、三段四種に分類されることが分かる。それぞれの内容について検討すると、第一段中の「頂・帯・趣・疊」の4語は、昭和34年の「送りがなのつけ方」で、完全な名詞として理解され

第4 名詞

16 名詞は、送りがなをつけない。

例 頂 帯 趣 疊 隣

(『現行の国語表記の基準』〈文部省〉118～119ページ)

と処理されている。第一段中のその他の3例「語、氷、印」は、昭和34年「送りがなの付け方」が内閣訓令・告示されたことに伴い、発表された「文部省公用文送りがな用例集」で、「送りがなの付け方」の16の条項を適用するとされたものである。結局第一段めとは、送り仮名法を審議していた第九期国語審議会が当該の8例をいずれも「名詞」ではなく「転成名詞」とであると判断し、かつ、名詞化の度合いに二段階があると示したものである。

第二段め「卸〜舞」、第三段め「折〜割」も、昭和34年の「送りがなの付け方」を参考としつつ、名詞化の度合いに従って二分類したものであるが、昭和48年に「送り仮名の付け方」が内閣告示・訓令されてから二十年近くの月日が経過し、判断のよりどころとなった微妙な言語感覚を現在追体験することは難しくなっている。

通則4の（注意）書きは、日本語における送り仮名の意義をよく伝えているものと考えられる。すなわち、ここの（注意）書きにある「組み」「光り」「折り」「係り」の「み」「り」の仮名は、それが付着した「組」「光」「折」「係」が語形変化する動詞の連用形であることを示すもので、一つ一つの日本語の動詞が秘める内的エネルギーが送り仮名によってシンボライズされることとなる。

7. 通則5は副詞・連体詞・接続詞

「活用のない語」の中に、名詞のほか、副詞・連体詞・接続詞が含まれ、この三品詞の送り仮名の付け方が一括して論じられている。

通則5

本則 副詞・連体詞・接続詞は、最後の音節を送る。

〔例〕 必ず 更に 少し 既に 再び 全く 最も
来る 去る
及び 且つ 但し

例外 (1) 次の語は、次に示すように送る。

明くる 大いに 直ちに 並びに 若しくは

(2) 次の語は、送り仮名を付けない。

又

(3) 次のように、他の語を含む語は、含まれている語の送り仮名の付け方によって送る。（含まれている語を〔 〕の中に示す。）

〔例〕 併せて〔併せる〕 至って〔至る〕 恐らく〔恐れる〕 従って〔従う〕
絶えず〔絶える〕 例えば〔例える〕 努めて〔努める〕
辛うじて〔辛い〕 少なくとも〔少ない〕
互いに〔互い〕
必ずしも〔必ず〕

(174ページ)

本則の「副詞・連体詞・接続詞は、最後の音節を送る。」とは、名詞の送り仮名の規定である通則3の例外の(1)「次の語は、最後の音節を送る。」と同じものである。ここでいう「最後の音節を送る。」とは、送り仮名において最低の仮名を付けることを意味し、通則1の「活用のある語は、活用語尾を送る。」の同一線上に存在する。併せて、最低の送り仮名によって表記することが日本語の文章作成並びにその読解にとって機能的であることが歴史的に確認されてきたものであろう。

次に、本則の語例の第一行は副詞、第二行は連体詞、第三行は接続詞である。日本語の副詞は、次に記述するように必ず他品詞から形成される（注8）。例えば、

真剣に 勉強する。

において、「真剣」は名詞であるが、副詞「真剣に」は「真剣」に伴うまじめさが正面の意味として用いられたものである。それゆえ副詞の多くは、通則5の例外の(3)に掲げられた「併せて」「至って」「恐らく」「従って」などの例のごとく、形成の元となった「併せる」「至る」「恐れる」「従う」などがたちどころに指摘できるものである。しかし、本則の語例「必ず」以下「最も」にいたる7語は、他品詞から副詞に形成されてから長い時間が経過し、副詞形成の元となった他品詞が現在の言語感覚では把握できないものが並べられていることを示し、ある意味では副詞の中の副詞と称せられるものといっていよい。

第二段「来る」「去る」は連体詞で、つねに体言を修飾する。「来る」の読み方は、「クル」とも読めるが、連体詞の場合は「キタル」と読む。文脈で判別が可能であるとの判断があった。第三段めは接続詞である。接続詞の表記について大切な事項が一つある。それは、「公用文における漢字使用等について」（昭和56年（1981）10月1日事務次官等会議申合せ）において、次のように接続詞の使い方が示されている。

オ 次のような接続詞は、原則として、仮名で書く。

例 おって かつ したがって ただし ついては ところが ところで また ゆえに
ただし、次の4語は、原則として、漢字で書く。

及び 並びに 又は 若しくは

文化庁刊『公用文の書き表し方の基準（資料集）』〈第一法規出版〉194ページ

すなわち日本語の接続詞の表記で、公用文（法令文も）は、「及び」「並びに」「又は」「若しくは」の4語だけ漢字書きにし、他のすべての接続詞は、仮名書きすると決められている。なぜ、公用文及び法令文で、そのような措置をしたか。それは、この四つの接続詞は、それが結び付ける前後の語や文が意義的に対等で、この四つの接続詞をまず文章中で正確に把握するところから文章の読解が始まるということを経験的に知っているからである。例えば、

公用文における漢字使用は、「常用漢字表」の本表 及び 付表（表の見方 及び 使い方を含む。）によるものとする。

（「公用文における漢字使用等について」から）

において、二つのアンダーライン部分は文脈上完全に対等に存在していることは確かである。

例外(1)の語例の「明くる」は連体詞,「大いに」「直ちに」が副詞,「並びに」「若しくは」が接続詞である。例外の(2)の「又」は接続詞。例外の(3)はすべて副詞である。ここでの副詞は、いずれも、副詞形成の元の品詞が「含まれている語」という表現で明示されている。なお、例外の(3)の副詞の整理は、形成の元となった品詞が基準になっており、一・二段が動詞、三段が形容詞、四段め「互い」は名詞、五段は副詞である。日本語の一つ一つの副詞は、副詞以外の品詞に関係するなど、陰影深いものとなっている。

8. 通則 6 は送り仮名を付ける複合の語

通則 6 は、単独の語について設けられた通則 1 から通則 5 までの規定を「漢字二字以上を用いて書き表す」ところの「複合の語」に適用したものである。

複合の語

通則 6

本則 複合の語（通則 7 を適用する語を除く。）の送り仮名は、その複合の語を書き表す漢字の、それぞれの音訓を用いた単独の語の送り仮名の付け方による。

〔例〕

(1) 活用のある語

書き抜く 流れ込む 申し込む 打ち合わせる 向かい合わせる
 長引く 若返る 裏切る 旅立つ
 聞き苦しい 薄暗い 草深い 心細い 待ち遠しい 軽々しい
 若々しい 女々しい
 気軽だ 望み薄だ

(2) 活用のない語

石橋 竹馬 山津波 後ろ姿 斜め左 花便り 独り言 卸商
 水煙 目印
 田植え 封切り 物知り 落書き 雨上がり 墓参り 日当たり
 夜明かし 先駆け 巢立ち 手渡し
 入り江 飛び火 教え子 合わせ鏡 生き物 落ち葉 預かり金
 寒空 深情け
 愚か者
 行き帰り 伸び縮み 乗り降り 抜け駆け 作り笑い 暮らし向き
 売り上げ 取り扱い 乗り換え 引き換え 歩み寄り 申し込み
 移り変わり
 長生き 早起き 苦し紛れ 大写し
 粘り強さ 有り難み 待ち遠しさ
 乳飲み子 無理強い 立ち居振る舞い 呼び出し電話

次々 常々

近々 深々

休み休み 行く行く

許容 読み間違えるおそれのない場合は、次の（ ）の中に示すように、送り仮名を省くことができる。

〔例〕 書き抜く（書抜く） 申し込む（申込む） 打ち合わせる（打ち合せる・打合せる） 向かい合わせる（向い合せる） 聞き苦しい（聞苦しい）
待ち遠しい（待遠しい）

田植え（田植） 封切り（封切） 落書き（落書） 雨上がり（雨上り）
日当たり（日当り） 夜明かし（夜明し）

入り江（入江） 飛び火（飛火） 合わせ鏡（合せ鏡） 預かり金（預り金）

扱け駆け（扱け駆け） 暮らし向き（暮し向き） 売り上げ（売上げ・売上）
取り扱い（取扱い・取扱） 乗り換え（乗換え・乗換） 引き換え（引換え・引換）
申し込み（申込み・申込） 移り変わり（移り変り）

有り難み（有難み） 待ち遠しさ（待遠しさ）

立ち居振舞い（立ち居振舞い・立ち居振舞・立居振舞） 呼び出し電話（呼出し電話・呼出電話）

（注意） 「こけら落とし（こけら落し）」、「さび止め」、「洗いざらし」、「打ちひも」のように前又は後ろの部分の仮名で書く場合は、他の部分については、単独の語の送り仮名の付け方による。

（174～175ページ）

本則に掲げられた語例は、まず、「(1) 活用のある語」と「(2) 活用のない語」に二分類される。次いで、活用のある語の語構成の相違に従ってグループ分けされる。「書き抜く」から「旅立つ」は、複合動詞であって、その複合動詞はまた四分類されている。第一種類は、「動詞+動詞」で送り仮名が一つのもの、第二の種類は、「動詞+動詞」であるが送り仮名が二つ以上あるものを含むもの。第三の種類は、「形容詞の語幹+動詞」、第四の種類は、「名詞+動詞」という構造を持っている。各々の種類ごとに列挙された語例は、相互に関連をもって存在する意義ある語例が摘出されている。例えば

書き抜く 流れ込む 申し込む

のグループでいえば、「書き抜く」は前部分が2音節、「流れ込む」「申し込む」は前部分が3音節で、送り仮名を省く「許容」の適用において、2音節の場合は「書抜く」と省略可能だが、3音節の場合「流れ込む」には類例に「流し込む」があるため省略不可能で、「申し込む」は多用される複合の語であるがゆえに、前部分が3音節であっても「申込む」という形態をとるということである。

次のグループである「聞き苦しい」から「女々しい」は、複合の形容詞である。しかし、「聞き苦

しい」から「待ち遠しい」までは、言語学的にも複合語であるが、「軽々しい」「若々しい」「女々しい」は、それだけで一つの概念を表すものとして言語学的には単純語に分類される。このような整理は、学問的ではないという批判があろうが、理解しやすい送り仮名法実現のための止むを得ない措置と考えられる（注9）。第三グループ「気軽だ」「望み薄だ」は形容動詞である。

「活用のない語」に列挙された61語は、語構成に従い12グループ21種に整理され、その語構成の代表例が掲げられている。具体的に第一段の「石橋」から「目印」のグループについて述べると、「石橋 竹馬 山津波」は、通則3の本則を適用する語例であり、「後ろ姿 斜め左 花便り 独り言」は、いずれも通則3の例外の(1)の規定が適用される送り仮名を含むものであり、「卸商 水煙 目印」は、通則4の例外の語例を含む類例であり、このグループは三種の語構成の異なったものが集められている。「田植え」以下の第二グループについても同様の説明が付けられることはいうまでもない。一例を挙げれば「墓参り」「日当たり」「夜明かし」について、もしこの三例の送り仮名を全部省略すると「墓参」「日当」「夜明」と読み誤まるおそれがあり、そこに「許容」の欄に示されているように、「日当り」「夜明し」という送り仮名の省き方の限界がある。

ここで、通則6にかかわる「許容」すなわち送り仮名の省き方について、例欄に示された「(1) 活用のある語」について6例、「(2) 活用のない語」の22例について、「許容」の語の形を一覧するとともに、送り仮名を省く原理について解説すると次ページのようになる。なお、この「許容」の語の形は、そのような慣用があり、かつ、読み間違えるおそれのない場合のみ認められるという前提条件があることは忘れられない（注10）。

日本語教育において、外国人は本則に従った語例と許容に従った語例を同一平面で見る場合が多い。そのとき、外国人はどちらが「正しい」か必ず問う。その質問に対する回答は、現行の「送り仮名の付け方」の「本文の見方及び使い方」の「五」に以下のように記述され、「本則」によることが期待されている。

- 五 各通則において、送り仮名の付け方が許容によることのできる語については、本則又は許容のいずれに従ってもよいが、個々の語に適用するに当たって、許容に従ってよいかどうか判断し難い場合には、本則によるものとする。

（『公用文の書き表し方の基準』〈文化庁〉170ページ）

「複合の語」の送り仮名の省き方一覧

〈「複合の語」の「許容」の語の形〉

(前提条件) 送り仮名を省いた形の慣用があり、また、読み間違えるおそれのない場合にのみ、以下の表のように送り仮名を省くことができる。

(注意) ここに掲げた「送り仮名を省いた形」は、見方を変えて、「語幹に活用語尾を送る形」と考えると理解しやすい。すなわち、「書抜く」「申込む」「打合わせる」などは、「かきぬく」「もうしこむ」「うちあわせる」を一語としてとらえて活用語尾を送ったものであり、「打ち合わせる」「向い合わせる」は、分析的にとらえた「打」「合」「向」「合」にそれぞれ活用語尾を送ったものである。

I 活用のある語

省き方 種類	本則を適用した語例	不活用部分を省く	前部分を省く		解 説
1	書き抜く		書抜く		動詞で、前部分が2音節の語は省く場合が多い。前部分が3音節の語でも省く場合がある。まず、不活用部分を省き、次に、前部分を省く。「向き合わせる」と読み間違えないようにする。形容詞で、前部分が2音節の語は省く場合が多い。前部分が2音節の語は省く場合が多い。
2	申し込む		申込む		
3	打ち合わせる	打ち合せる	打合せる		
4	向かい合わせる	向い合せる			
5	聞き苦しい		聞苦しい		
6	待ち遠しい		待遠しい		

II 活用のない語

省き方 種類	本則を適用した語例	不活用部分を省く	前部分を省く	後ろ部分を省く	送り仮名をすべて省く	解 説
1	田植え			田植		名詞で、後ろ部分が2音節の場合、省く場合が多い。後ろ部分が2音節の場合、省く場合が多い。読み間違えるおそれのある「落書(らくしょ)」は古典的語。後ろ部分が3音節の場合、すべて省く場合は少ない。「日当(にっとう)」と読み間違えないようにする。「夜明け」と読み間違えないようにする。前部分が2音節の場合、省く場合が多い。前部分が2音節の場合、省く場合が多い。前部分が3音節の場合、すべて省く場合は少ない。「預け金」「預金(よきん)」と読み間違えないようにする。
2	封切り			封切		
3	落書き			落書		
4	雨上がり	雨上り				
5	日当たり	日当り				
6	夜明かし	夜明し				
7	入り江		入江			
8	飛び火		飛火			
9	合わせ鏡	合せ鏡				
10	預かり金	預り金				
11	抜け駆け		抜駆け			前部分が2音節の場合、省く場合が多い。前部分が3音節の場合、すべて省く場合は少ない。前部分が2音節の場合、省く場合が多い。「申し込み」のような多用される語は、3音節でも省く場合がある。なお、これらの語が社会・経済関係などの熟語として用いられる場合、送り仮名をすべて省くことがある。
12	暮らし向き	暮し向き				
13	売り上げ		売上げ		売上	
14	取り扱い		取扱い		取扱	
15	乗り換え		乗換え		乗換	
16	引き換え		引換え		引換	
17	申し込み		申込み		申込	
18	移り変わり	移り vari				
19	有り難み		有難み			
20	待ち遠しさ		待遠しさ			
21	呼び出し電話		呼出し電話		呼出電話	前部分が3音節の場合、すべて省く場合は少ない。前部分が2音節の場合、省く場合が多い。前部分が2音節の場合、省く場合が多い。前部分が2音節の場合、省く場合が多い。なお、漢字3字以上の語は、送り仮名をすべて省くことが多い。

特殊な省き方をするもの

22	立ち居振る舞い	立ち居振舞い・立ち居振舞・立居振舞	「ふるまい」は「振舞」と送り仮名を省く形が多用されるので、「振舞」が他の漢字と結び付いた場合、特殊な送り仮名の省き方をする。
----	---------	-------------------	--

9. 通則7は漢字の有効使用

昭和34年（1959）の「送りがなのつけ方」では、複合名詞はその通則20で取り上げられ「20 慣用が固定していると認められる次のような語は、原則として送りがなをつけない。」とあり、「原則として」という条件で、誤読・難読の起こるような場合は、送り仮名を付けることが容認されている。一方、現行の「送り仮名の付け方」では、下記のように慣用があれば送り仮名をすべて省く規則になっている。

通則7

複合の語のうち、次のような名詞は、慣用に従って、送り仮名を付けない。

〔例〕

- (1) 特定の領域の語で、慣用が固定していると認められるもの。

ア 地位・身分・役職等の名。

関取 頭取 取締役 事務取扱

イ 工芸品の名に用いられた「織」,「染」,「塗」等。

《博多》織 《型絵》染 《春慶》塗 《鎌倉》彫 《備前》焼

ウ その他。

書留 気付 切手 消印 小包 振替 切符 踏切

請負 売値 買値 仲買 歩合 両替 割引 組合 手当

倉敷料 作付面積

売上《高》 貸付《金》 借入《金》 繰越《金》 小売《商》 積立《金》

取扱《所》 取扱《注意》 取次《店》 取引《所》 乗換《駅》 乗組《員》

引受《人》 引受《時刻》 引換《券》 《代金》引換 振出《人》 待合《室》

見積《書》 申込《書》

- (2) 一般に、慣用が固定していると認められるもの。

奥書 木立 子守 献立 座敷 試合 字引 場合 羽織 葉巻 番組

番付 日付 水引 物置 物語 役割 屋敷 夕立 割合

合図 合間 植木 置物 織物 貸家 敷石 敷地 敷物 立場 建物

並木 巻紙

受付 受取

浮世絵 絵巻物 仕立屋

(注意)

- (1) 「《博多》織」,「売上《高》」などのようにして掲げたものは、《 》の中を他の漢字で置き換えた場合にも、この通則を適用する。

- (2) 通則7を適用する語は、例として挙げたものだけで尽くしてはいない。

したがって、慣用が固定していると認められる限り、類推して同類の語

にも及ぼすものである。通則 7 を適用してよいかどうか判断し難い場合には、通則 6 を適用する。

(175～176ページ)

ここで改めて、複合の語についての送り仮名の持つ意義について確認しておこう。上掲の「(2) 一般に、慣用が固定していると認められるもの」の「字引」を取り上げ検討すると、昭和34年の「送りがなのつけ方」の「送りがなのつけ方用例集」では、通則20を適用して「字引」、通則19を適用して「字引き」の2通りの語形が認められている。この両者の関係を考えると、前者は漢字をそのまま辞書としての「ジビキ」すなわち語と理解することであり、後者は語を漢字に分解して、「ジをヒク（本）」と把握することを意味する。現行の「送り仮名の付け方」が「字引き」を拒否し、「字引」を認知したのは、漢字と語の関係がこれまで離れる方向にあったものを漢字と語の関係を取り戻そうとするものである。このような複合の名詞の取り扱い、語を構成する漢字によって理解するのではなく、漢字をそのまま人の名前や地名のように語として理解するもので、日本人の漢字に対する伝統的な接し方の同一線上にあり、一つの文化遺産として尊重することを意味する。

いま、北原保雄編『日本語逆引き辞典』〈大修館〉で複合の語の、後ろ部分が「～引き」となるものを摘出すると、「逢い引き」「税引き」「棒引き」「瑛瑛引き」「塩引き」「忌引」「置き引き」「画引き」「福引き」「幕引き」「客引き」「逆引き」「駆け引き」「木挽き」「孫引き」「字引」「生き字引」「籤引」「差し引き」「巢引き」「水引」「黒水引」「風邪引き」「細引き」「退っ引き」「首っ引き」「手引き」「立て引き」「後引き」「瀬戸引き」「宿引き」「綱引き」など71語の語例が掲げられている。ここで「字引」「籤引」「水引」には送り仮名がないが、他は送り仮名が付けられている。現実の語例の表記にあたって、どういう語例は送り仮名を省き、また、送り仮名を付けるか迷う場合が多い。そのときの心得が（注意）の(2)「通則 7 を適用する語は、例として挙げたものだけで尽くしてはいない。～～通則 7 を適用してよいかどうか判断し難い場合には、通則 6 を適用する。」である。この（注意）書きとは複合の語を読みやすくするための規定で、戦後の国語施策の同一平面上にあるもので、漢字の表意性を殺すものといってよい。通則 7 の前半の本則では、漢字の表意性を生かした慣行に従い、後半では、漢字を表音的に位置付けようとする。ここに現在の国語施策のいかんともしがたい問題点がある。

10. 「付表の語」とは文化遺産

昭和56年（1981）10月1日内閣告示・訓令の「常用漢字表」には、「付表」が添えられ、110語が掲げられている（注11）。この110語は、一般的な漢字の使い方と異なって日本人が育みそだてた文化遺産ともいえるいわゆる「熟字訓」や「当て字」である。この「付表」の語の送り仮名の付け方は、次のようになっている。これは規定にあるように送り仮名の付け方が問題になる語だけであって、限定列举である。

付表の語

「常用漢字表」の「付表」に掲げてある語のうち、送り仮名の付け方が問題となる次の語は、次のようにする。

- 1 次の語は、次に示すように送る。

浮つく お巡りさん 差し支える 五月晴れ 立ち退く 手伝う 最寄り
なお、

次の語は、() の中に示すように、送り仮名を省くことができる。

差し支える(差支える) 五月晴れ(五月晴) 立ち退く(立退く)

- 2 次の語は、送り仮名を付けない。

息吹 棧敷 時雨 築山 名残 雪崩 吹雪 迷子 行方

(176ページ)

11. ま と め

現行の「送り仮名の付け方」とは、これまで見てきたように、「活用のある語は活用語尾を送る。」「語形別の分類」「単独の語・複合の語」という把握の仕方によって、送り仮名の付け方が通則の数によって七つにまとめられた。これまでの昭和34年「送りがなのつけ方」は品詞別に26通則から成り、その26通則が同一平面に置かれていた。すなわち、各品詞ごとに送り仮名の付け方が決められており、通則ごとの関連がなかったからである。現行の「送り仮名の付け方」は通則数が少ないとともに、七つの通則すべてが相互に関連し、言語学的な表現をすれば、「構造化」している。具体的にいえば、一通則記憶すれば、残りの他の通則は芋づる式に使用することができる。その基本は、通則1の「活用のある語は活用語尾を送る。」で、その裏腹として、通則3「名詞は送らない。」というルールが成立する。また、通則1に関係して、「派生・対応」のある語は「派生・対応」を表すために「活用語尾以外を送る」という通則2と「活用語から転じた名詞は、活用語に準じて送る」という通則4が、それぞれ「活用のある語」と「活用のない語」に関して立てられる。すでに述べたように、「活用のある語は活用語尾を送る」ということは、語形を明らかにするために最少限の送り仮名を付けるということだが、その同一線上に、通則5「副詞・連体詞・接続詞は、最後の音節を送る」というルールが当然のように立てられる。そして、「単独の語」にかかわる五つの基本的な法則を「複合の語」に援用し、送り仮名を付ける通則6と送り仮名をすべて省く通則7を立てる。現行の「送りがなのつけ方」は通則数が少ないとともに構造化されていること知らせてい。

送り仮名法には、社会で多用されている語の書き表し方を調査し、一語一語を用例集で示す方法と、日本語表記の実態から帰納した分かりやすい法則で示す方法がある。表記というものが、語義や語音と相違して比較的变化し難いものなので、一語一語を用例集で示す方法も有意義であるが、

現在の我が国で日々使用され、生産される多量の語彙の処理のためには、簡明で系統的な送り仮名法の実現が求められる。その要請に応えたものが現行の「送り仮名の付け方」であり、日本語教育の必修の項目であらう。

(注)

- 1 この小論において、昭和48年(1973)6月18日内閣告示・訓令の現行の送り仮名法は「送り仮名の付け方」、昭和34年7月11日内閣訓令・告示の送り仮名法は「送りがなのつけ方」と告示文に従い区別してある。
- 2 国立国語研究所編『送り仮名法資料集』の解説(204～219ページ)並びに「送り仮名法文献集」(92～202ページ)
- 3 「送り仮名の付け方」で使用されている術語は、「送り仮名の付け方」の『本文』の見方及び使い方、文化庁刊『公用文の書き表し方の基準(資料集)』(169～170ページ)に解説されている。
- 4 島田昌彦著『国語における文の構造』〈風間書房〉の「(二) イメージを生むもの」の「1 国語における形容詞」(482～514ページ)
- 5 島田昌彦著『日本語の再生—わたしたちの国語を考える—』〈桜楓社〉の「難産だった送り仮名の付け方」(127～152ページ)
- 6 島田昌彦著『国語における自動詞と他動詞』〈明治書院〉の「三 『当用漢字音訓表』の自他」の「2 動詞の訓の整理と『派生・対応の関係』」(589～600ページ)
- 7 上掲6の「二 本居春庭の動詞認識」の「4 六段の分類の構造」(491～500ページ)
- 8 上掲4の「四 イメージの展開と生花型構造」の「(二) イメージを生むもの」の「2 国語における副詞」(515～571ページ)
- 9 「単純語」と「複合語」については、国語学会編『国語学大辞典』〈東京堂〉の「語構成」の項(423～427ページ)
- 10 島田昌彦編『常用新用字用語辞典改訂版』〈東京書籍〉の「この辞典の編集方針」(4～8ページ)と裏見返しの一覧表。
- 11 「付表」の語とは次ページの110語をいう。

付 表

あす	明日	さなえ	早苗	はつか	二十日
あずき	小豆	さみだれ	五月雨	はとば	波止場
あま	海女	しぐれ	時雨	ひとり	一人
いおう	硫黄	しない	竹刀	ひより	日和
いくじ	意気地	しばふ	芝生	ふたり	二人
いちげんこじ	一言居士	しみず	清水	ふつか	二日
いなか	田舎	しゃみせん	三味線	ふぶき	吹雪
いぶき	息吹	じゃり	砂利	へた	下手
うなばら	海原	じゅず	数珠	へや	部屋
うば	乳母	じょうず	上手	まいご	迷子
うわき	浮気	しらが	白髪	まっか	真っ赤
うわつく	浮つく	しろうと	素人	まっさお	真っ青
えがお	笑顔	しわす	師走	みやげ	土産
おかあさん	お母さん	(「しはす」とも言う)		むすこ	息子
おじ	叔父	すきや	数寄屋	めがね	眼鏡
	伯父		数寄屋	もさ	猛者
おとうさん	お父さん	すもう	相撲	もめん	紅葉
おとな	大人	ぞうり	草履	もより	木綿
おとめ	乙女	だし	山車	やおちょう	最寄り
おば	叔母	たち	太刀	やおや	八百長
	伯母	たちのく	立ち退く	やまと＝	八百屋
おまわりさん	お巡りさん	たなばた	七夕	ゆかた	大和＝ (大和絵)
おみき	お神酒	たび	足袋	ゆくえ	大和魂等
おもや	母屋	ちご	稚児	よせ	浴衣
	母家	ついたち	一日	わこうど	行方
かぐら	神楽	つきやま	築山		寄席
かし	河岸	つゆ	梅雨		若人
かぜ	風邪	でこぼこ	凸凹		
かな	仮名	てつだう	手伝う		
かや	蚊帳	てんません	伝馬船		
かわせ	為替	とあみ	投網		
かわら	河原	とえはたえ	十重二十重		
	川原	どきょう	読経		
きのう	昨日	とけい	時計		
きょう	今日	ともだち	友達		
くだもの	果物	なこうど	仲人		
くろうと	玄人	なごり	名残		
けさ	今朝	なだれ	雪崩		
けしき	景色	にいさん	兄さん		
ここち	心地	ねえさん	姉さん		
ことし	今年	のら	野良		
さおとめ	早乙女	のりと	祝詞		
ざこ	雑魚	はかせ	博士		
さじき	棧敷	はたち	二十		
さしつかえる	差し支える		二十歳		
さつきばれ	五月晴れ				

(110語)